

こ子供に尋ねるこ、その中の幾人かは必ず、足は二本で、手が二本こ答へる。即ち四本こ答へる子供は現實的な見方に立つてゐるに對し、足が二本、手が二本こ答へる子供は僞人的な見方に立つてゐる。子供が未だ僞人的な見方より外には考へられない間はこもかく、現實的な見方が可能になつて來た場合には、或程度まで、後者の見方によつて僞人的な見方を批判させておく必要があるまいかこ考へられる。なぜならば多くの童話や口繪の中に、不必要なほご幼稚な子供の僞人的な見方に迎合し、それが子供の現實的

な見方の發達を妨害してゐるやうに見受けられるものが往々あるからである。そして僞人的な見方はこもすれば誤まつた知識こなつて頭に残り、そうした誤つた知識が氣付かれず、いつまでも矯正されず、何かの折にふこ、錯覺こなつて現れ、困るここは人々のよく經驗するここである。されば童話や口繪のそれ自體の吟味は勿論のここ、それを子供に與へる場合の扱ひ方は、随分こ難かしくもあり又、重要なここでもあるこ思はれる。(三)

## 子供の言葉をどう聞くか

東京市大和郷幼稚園 坂 内 こ ツ

——先生○さんがいざめるんです

いぢめるこいふ言葉を幼児の世界から取り去り度いこ希つて居る私は聞く度にぞつこする、されこよく考へて見ると子供のいぢめるこいふのは大人が思うやうに故意に

するこか惡意を以てするこかこいふ意味ではなく、冗談に手をふり上げた事も無邪氣にカラカッタ事も少しく自分の氣にくはぬ事をされるこ、一口にいぢめられたこいふのだから、神經を尖らせて嫌がつて居るにも當らないこ思ひ直

すのである。

——おぢい様はおぢい様だけで名は知らない。

之は或る顯官にあられた方の孫さんが、或小學校の入學檢定の時に答へた言葉である、何こいふ純真な心のあらはれであらう、日常家人の心掛のゆかしさも思はれて美しい。

——お母様、出入りの人はね、おぢい様は偉い偉いこいふけれどおぢい様だつて馬鹿な事があるよ、僕がね、たゞみ紙を教へて上げてもらわないのさ、馬鹿な處もあるね。

一國の政治したゞみ紙を比較するのが、幼児の頭である、いふこゝを聞かないからこいつても叱る氣にもおこる氣にもなれないのが當然である。實際家はみんな布袋主義になるわけである。それなのに間斷なく幼児に接して居るこ迷う事ばかりである。何事も程度の問題であるこいふが布袋主義は殊に程度をきめるのがむづかしい、日常の迷の中心はこゝにあるかと思はれる。

——もう七つねるこお正月よ、M先生がそうおつしやつたの。

二十八日になつても九日になつても同じ事をいふので

姉や兄が氣にして教へてやるがいつかふ聞き入れない。ますます強く主張して力んで居る。私はすぐに姉や兄にいひきかせて大晦日まで其まゝにして置いた、正しき教へ方は或時期に至れば分つて来る、先生を信ずる此美はしき心情を些かなりさも曇らせるに忍びない、先生に感謝するばかりである。

——坂内先生はバナナだからバナナ頂だいおやつに食べるから

覺束ない假名で手紙にかいてよこす、時には大勢が口々にいひ出す、ハイバナナ上げます澤山召し上れこいつて貰うのが嬉しいらしい、其他の先生にもそれごとく頭字をこつていろんな事をいふが、姓名をつける意味ではない、不思議な事には坂内先生だからバカこいふ人が一人もない。——試験は面白いもんだけぞ試験の前の日は實にいやだ。

實にいやだこは大人らしい言葉であるが、子供のいふいやだは軽い意味ではあるまいか、試験は子供を苦しめるこ早合點するに及ばない、或人が「子供を檢定して貰うのですもの大に感謝しなければならぬ、みんなに御禮を貰つ

たつてあの時のやうに眞剣で見て上げられるものではない「ミ、又或人は曰く「検定の時には心の鏡をきれいにして正しくうつすより外はないから幾日も前から一切の事を遠ざけ家の事でも子供の事でもむづかしい事は耳に入れないやうにして居る、心を清め信念を以て事に當れば間違はない「ミ、世の親さん達に此心理をよく理解して貰いたい、往々にして心の鏡を曇らせようミなさる人のあるのは歎はしい事である。

——いつもの程度でやつて来た。

昨日の試験に駈け足は早く出来ましたがミ問はれたのに對して答へた子供の言葉である、生意氣ミ解釋するのは大人が悪い。ぶつつかつたミいふも衝突したミいふも白紙に受ける印象に難易はない、大人はミかく自分の頭で子供を判断するから間違が起るのである。

——お母様僕ね試験の時○君がミびんを出されてもわかないで居るから聲を出さないで口の形でミびんミ教へて上げたんだけミ○君はわからないんだもの。

神聖な試験場である、試験官の前も憚らず友達に教へん

ミするは不埒千萬なり入學許可まかりならんミ立腹なさる方はないであらうが、あんな事をしてミ一笑に附し可愛いもんだミほゝゑまるゝ方もあらう、友達を助けんミする友情のあらはれミ受取らるゝ方もあらう、又は反對に自分の事も充分に出来もしないで人の世話を焼く出過ぎ者よミさけすまるゝ方もあらう、同じ一言一行でも鏡によつてうつり方が違ふ、正しくうつさんミするには正しき鏡を用意せねばならない。